The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	タイ語を母語とする学習者の助詞選択のストラテジーについて : 場所を表す「に」と「で」を中心に
Author(s)	Dhanasarnsombat, Jarunan
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54306
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	Dhanasarnsombat Jarunan（ダナサーンソムバット ジャルナン）
博士の専攻分野の名称	博　士（日本語・日本文化）
学　位　記　番　号	第　２３４１０　号
学位授与年月日	平成21年９月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	タイ語を母語とする学習者の助詞選択のストラテジーについて－場所を表す「に」と「で」を中心に－
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　鈴木　　睦 （副査） 教　授　宮本マラシー　　教　授　真嶋　潤子　　准教授　堀川　智也 准教授　筒井　佐代

論　文　内　容　の　要　旨

外国人日本語学習者における格助詞の習得に関してはこれまで多数の研究がなされ、調査されてきた。特に場所を表す「に」と「で」の使い分けについては外国人日本語学習者にとって学習困難な一つの項目として取り上げられ、異なる母語の学習者を対象者に扱って様々な結果が報告されている。しかし、多くの研究は得られた結果を、母語と関係なく学習者に共通する中間言語の現象として捉える立場に立ち、学習者の母語の転移への配慮が欠如している点が指摘できる。また、異なる文型における、学習者の場所を表す「に」と「で」の選択使用の傾向にしか焦点が置かれず、同一の動詞における学習者の助詞選択使用の傾向はどのように類似、或いは相違するかについては言及されていない。

そこで、本研究は寺村（1982）によって分類された「状態性」「動作性」そして「移動性」と三つの意味概念が含意されると指摘されている「移動・変化表現を表す動詞述語類」を取り上げ、複数の意味概念が含まれる同一の動詞の場合においてタイ語を母語とする学習者は何を手掛かりにして助詞を選択使用するかを、中級・上級のタイ語を母語とする学習者（計135人（内訳：中級学習者＝114人、上級学習者＝21人）に調査紙による1）文法テスト（タイ日翻訳テストと穴埋めテスト）と　2）フォローアップインタビュー　の二種類の調査を実施し把握しようと試みた。また、対照するために15人の日本語母語話者にも穴埋めテストのみ行った。

本稿の意義は三つの点が挙げられる。一つ目は、性質の異なる二種類のテストである穴埋めテストとタイ日翻訳テストを文法テストに採択したことにより、穴埋めテストからは学習者の助詞選択に左右する文構成要素の影響が把握することが可能となり、タイ日翻訳テストからは、穴埋めテストのみからは計り知れない母語（タイ語）からの転移が窺え、二つのテスト方法を用いたことで母語の転移に配慮した学習者の助詞選択の使用傾向に関わる要因を見出すことができたことにある。二つ目は、異なる学習段階を調査対象者に扱ったことで、それぞれの学習段階が用いる言語処理のストラテジーの特徴、言語処理のストラテジーの変容が確認できたことにある。

【1　穴埋めテスト】

穴埋めテストにより文構成要素が学習者の助詞の選択使用に影響を及ぼしていることが分かった。その傾向は大きく、(1)先行名詞の性質に頼って助詞を選択する基準に用いる「ユニット形成のストラテジー」と(2)動詞自体を助詞の選択の基準に用いる「パターン形成のストラテジー」の二つがある。

ユニット形成のストラテジーは、「上」「前」のような「位置を表す名詞」を「に」と一塊として捉えるストラテジーと、「浴室の床」や「ゴミ箱」のような比較的「狭い空間を表す名詞」には「に」を、そして「台所」「教室」のような「広い空間を表す名詞」には「で」を選択するような、先行名詞が表す広狭意味概念を助詞の選択使用の基準にするストラテジーの二種類がある。一方、パターン形成のストラテジーは、特定の動詞と共起する助詞とパターンで記憶するストラテジーである。

先行研究で報告されているようにユニット形成のストラテジーを用いて「位置を表す名詞」を「に」と一塊で捉えることで「に」の使用が促されるが、その反面「に」の過剰使用の原因にもなり得る。しかし、「に」の過剰使用の原因は学習者がユニット形成のストラテジーを用いる他に、「～に＋動詞」のように特定の動詞を「に」とセットで覚えるパターン形成のストラテジーを用いていることも一つの原因であることが分かった。

学習者は「～に＋動詞」のパターン形成のストラテジーを使用することにより、適切なところで「に」の正用が促される一方で、パターン化しすぎ、状況を判断基準にせず、不適切なところにまで「に」を過剰に使用する可能性もある。

また、学習者は「位置を表す名詞」がなくても先行名詞が比較的狭い空間の場合には「に」を使い、反対に広い空間の場合には「で」を使うといった、先行名詞の意味概念をも助詞を選択する手掛かりにしている。しかし、このストラテジーは「位置を表す名詞＋に」のユニット形成のストラテジーの使用より使用傾向が薄く、他の言語処理のストラテジーに付加する形で、副次的な言語処理のストラテジーとして用いているといえる。

学習者が用いるストラテジーが過剰使用をもたらす要因になる他に、「を」の選択使用を引き

学習者が用いるストラテジーが過剰使用をもたらす要因になる他に、「を」の選択使用を引き起こす要因にもなりうる。これは学習者が特定の動詞と共起する助詞を誤って「～を＋動詞」で記憶し、パターン化することや、先行名詞の意味概念の取り違いによる。

学習者が特定の助詞と共起する助詞を誤って「～を＋動詞」とパターン化する背景には、日本語の自動詞と他動詞が正確に区別できないことにも関係していると考えられ、日本語とタイ語の両言語の形態的な違いに起因していると見られる。また「マット」「ベッド」のような「物」に近い意味性質を持つ場合には、学習者はそれを「場所」ではなく「動作の対象」として捉えてしまい、「を」を産出することになる。

【2　タイ日翻訳テスト】

タイ日翻訳テストを通して学習者の助詞選択の使用を左右するタイ語の転移が窺えた。それは大きく、（1）タイ語の空間表現の概念 と（2）タイ語の補助動詞及び動詞の意味概念 の二つに分けられる。

タイ語の空間表現の概念に関して、設問文には日本語の「位置を表す名詞」がないにも関わらず、学習者の訳文には現れたことから、日本語に訳す際に学習者はタイ語の空間表現を借用し、適用すると考えられる。そのため、「位置を表す名詞」が学習者の訳文に現れ、間接的に「位置を表す名詞＋に」のユニット形成のストラテジーの使用を促進する原因になる。

補助動詞の本来の意味も学習者の助詞を選択する手掛かりの一つである。主体の存在を強調する補助動詞が文中にある場合、学習者はそれによって「に」を選択することが確認できた。また、様々な補助動詞と結合して連想することも助詞選択の使用を左右する。この例として「寝る」が挙げられる。学習者は日本語の「寝る」に対応するタイ語の動詞を「じっとする様」「眠る」等といった「状態を示す」補助動詞と結びつく形を連想すれば、「に」が使われるが、「寝てごろごろする」という「動作を示す」補助動詞と結合する形を連想すれば、「で」が使われる。

タイ語の転移は上記の補助動詞以外に、タイ語の動詞意味概念にも見受けられる。タイ語の動詞は日本語とは異なり、動詞の意味概念には「結果状態」が含意されないこと、動作のプロセスが長いこと及び移動より動作の方に焦点を当てることが特徴である。これは学習者に「で」の選択使用を促す一つの要因になっているといえる。

【3　各学習段階の助詞選択使用傾向の特徴】

中級と上級学習者を対象者に扱ったことで各学習段階の用いる助詞選択使用の傾向の相違点と類似点が把握できた。類似点として「～助詞＋動詞」のパターン形成のストラテジー及び先行名詞の広狭意味概念による助詞の選択使用のストラテジーが助詞を選択するための重要な言語処理のストラテジーとして用いられ、タイ語の意味概念の借用も助詞を選択する基準の一つとなっていることが挙げられる。一方、相違点として、中級学習者に特徴的な点は「位置を表す名詞＋に」のユニット形成のストラテジーの使用が顕著である点が挙げられ、上級学習者に特徴的な点は、場所を表す「に」と「で」に対する自ら築いた独自の文法規則をも適用している点が挙げられる。

「～助詞＋動詞」のパターン形成のストラテジー及び先行名詞の広狭意味概念による助詞の選択使用のストラテジーは両学習段階の学習者が用いているため、中級・上級学習者にとって助詞を選択するための重要な言語処理のストラテジーであるといえる。しかし、パターン形成のストラテジーや先行名詞の意味概念による「に」の過剰使用、及び自動詞と他動詞との混同の影響による「を」の使用は中級学習者には特に顕著に見られたため、助詞の機能及び動詞の分類がまだ正確に把握できないことが原因で選択される「を」の使用は中級学習段階の特有な現象であると言及できる。

タイ語の意味概念の借用も中級・上級学習者にとって助詞を選択する基準の一つとなっている。これは上述のようにタイ語の空間表現と補助動詞及び動詞の意味概念が挙げられる。前者は「に」の使用を促進するのに対して、後者は設問文によって「に」と「で」の両方の使用を促す可能性がある。

これらの類似点に対して、中級学習者は「位置を表す名詞＋に」のユニット形成のストラテジー、「助詞＋動詞」のパターン形成のストラテジー、先行名詞の広狭意味概念によって助詞を選択する傾向が顕著に見られた。特に「位置を表す名詞＋に」のユニット形成のストラテジーの使用は中級学習者に著しく観察されたが、上級段階になると使用の傾向が減少することから、「位置を表す名詞＋に」のユニット形成のストラテジーが中級学習者にとって助詞を選択する重要な手掛かりであることを反映していると同時にストラテジーの使用の限界が中級段階であることも考えられる。

上述したような、ユニット形成のストラテジー、パターン形成のストラテジー、母語の転移のほか、中級学習者は既習知識による言語処理のストラテジーを使用し、上級学習者は独自の文法規則に基づいて「に」と「で」の選択使用を行っている。中級の学習者は、既習知識の「住む」「ある」などと対比し、類似する動詞だと判断した場合には、「に」を選択し、「買う」などと対比して類似する動詞だと判断した場合には「で」を選択するというように、既習の知識と関連付けて、類似性を見出し、動詞が「存在」であるのか「動作」であるのかにより助詞の「に」と「で」を使い分ける既習知識による言語処理のストラテジーを使用している。その反面、上級の学習者は助詞の用法に関して独自の文法規則を構築しており、「に」の用法には「存在」「長期的」「移動性がある」とし、「で」には「動作」「短期的」「移動性がない」という規則性を作り出している。そしてそれらの独自の文法規則に基づいて「に」と「で」の選択使用を行っているが、上級学習者になっても日本語母語話者の助詞選択使用の傾向に近似していくとは限らないと結論することができる。

論文審査の結果の要旨

DHANASARNSOMBAT, JARUNAN氏の博士論文「タイ語を母語とする学習者の助詞選択のストラテジーについて　―場所を表す「に」と「で」を中心に―」の論文審査結果の要旨は以下の通りである。

本研究は、タイ語を母語とする日本語学習者の「に」と「で」の選択使用傾向とその背景にある要因を把握するという目的で、中級・上級のタイ語を母語とする学習者（計135人）に、1）文法テスト２種類（タイ日翻訳テストと穴埋めテスト）と　2）フォローアップインタビュー　の調査を実施し考察したものである。DHANASARNSOMBAT氏は、修士論文においてもタイ語を母語とする日本語学習者の「に」と「で」の選択使用傾向とその背景にある要因を考察しているが、博士論文においては、特に「移動・変化表現を現す動詞述語類」が用いられた場合の「に」と「で」の選択傾向に重点をおいて、学習者が何をてがかりにして日本語の助詞を選択しているのかを考察している。

結果として、学習者は動詞及び学習段階によって助詞の選択使用傾向が変化すること、そしてその背景には学習者が用いる様々な言語処理ストラテジーがあり、それらのストラテジーの中には母語であるタイ語の転移が助詞の選択の基準となるものも含まれていることが指摘されている。

タイ語からの転移が見られるものとして、空間表現とタイ語の動詞の特徴があげられている。一例を挙げれば、設問のタイ語の文には「nai～の中」という位置を表す言葉がないにもかかわらず、学習者が翻訳した日本語には、「～の中」を付けて訳したものが観察された。この現象について、DHANASARNSOMBAT氏は「タイ語においては、ある特定の場所で何かを行う際、その場所の特定の空間を示す言葉が伴われる傾向にあるため、その空間表現の特徴が日本語の助詞の選択に転移する」と解釈している。タイ語の空間表現及びタイ語の動詞の特徴がタイ語を母語とする学習者の助詞の選択に、誤用においても、正用においても影響を与える点を具体的に指摘している点が興味深い。今回扱われた動詞以外の場合にどうなるのか、今回扱った以外のタイ語の場所を表す前置詞はどのように影響するのか等、本研究はさらに研究を発展させることが可能である。

日本語教育の分野における近年の中間言語研究では、ともすれば母語からの転移が軽視される傾向にあるが、学習者の母語であるタイ語からの影響を考察した本研究は、言社専攻にふさわしい特色をもった研究であり、審査委員は全員一致して合格と判定した。